

# 1. プロローグ： 受容的能動性によるデザイン

本展は、フィンランドと日本両国に共有可能なデザイン様式を再発見し、両国の未来のデザインの応答を促進させていくこと、さらには、両国と同様のメカニズムを持つ「第三の場所」の文脈からそのデザイン様式を翻訳することで、その理論的な普遍性を示すことを目的としています。

ここで注目したのは、フィンランド発祥のナショナル・ロマンティシズムの精神です。

従来のナショナル・ロマンティシズムは近代黎明期に勃興した印象様式のひとつとされてきました。20 世紀を通じて東西陣営双方の軍事的、政治的、経済的な外圧に晒される中で、フィンランドはそれらをいなすことで乗り越えていく道を発見しました。そのためには、異なる考えを持った人々が互いに心を通わせ、他者の意見に耳を澄まし、その総意を表すものとしてデザインは必要不可欠なものでした。

私はフィンランド各地での様々な調査や実地検分を行うにつれ、表層に現れた様式の奥に秘匿された本来の精神構造にこそ両国の未来に賦活すべきデザインの普遍があると思い至りました。

そのフィンランドの社会が持つ根源的な性質を「受容的能動性」と捉え、独立期と近代黎明期が重なったフィンランドで生まれたナショナル・ロマンティシズムの基本的メカニズムであるとの結論に至りました。

独立以降の苦難の歴史の中で、フィンランドは国を挙げてそのような態度を社会全体が持ち続けるというモデルを体現してきたのではないかと思います。

そのメカニズムを明らかにして言語化し多様な他者と共有することが重要です。なぜならば、近代と現代が連続したフィンランドデザインが持つ総合性と普遍性を、フィンランド以外の「第三の場所」に見いだせて初めてフィンランドのナショナル・ロマンティシズムは国際的に言語化されるからです。必然的に、展示物は建築に専門化されていない表現や技術によるフィンランド以外のデザインであらねばなりません。

その結果として本展では、切り取られた日本の近現代建築のいくつかのシーンをその対象となり得るオブジェクトとして例示しています。加えて、私が一年余りフィンランド各地を廻ってコレクションした立体造形物とライト(光)のコラージュ・ドローイング「ラーニング・フロム・フィンランディア」を含めて、「18 のオブジェクト」と称しています。

本会場では、それらをご覧いただいた後に、同一の展示物をフィンランド・ヘルシンキ、ドイツ・ベルリン、ワイマールの2国3会場にて展示する「3つの展覧会」を展示しています。これらは、フィンランドのナショナル・ロマンティシズムのメカニズムを共有する世界(フィールド)、そ

の建築分野における理論化、その結果生まれる空間原理、の3つのステップを明示するものです。

最後に、それらの過程を経て生まれた「3つのプロジェクト」をご覧くださいます。会場中央に集められた立体造形群は、技術論的な体系としてデザインの発展からこれらの構成を凝縮したモデルとなっています。

フィンランドとドイツでの3つの展覧会は2020年の春夏に開催予定だったものが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって1年以上の大幅な延期を余儀なくされたものです。度重なる開催の延期は私自身大変残念なものでしたが、コロナ禍の生活は世界中の全ての人々にその人が所属する社会なりの新しい規律や倫理をもたらすメカニズムをウイルスが持っていたことを示したとも言えます。

本来ならば人類はこの環境をもっとポジティブな方法によって獲得すべきであったでしょう。それこそが、「受容的能動性によるデザイン」が持つべき総合性ではないでしょうか。

本展でご覧いただくフィンランドのナショナル・ロマンティシズムの再解釈とその展開は、そうした地球上の異なる場所の異なる事柄の間に働く無数の因果律の全体を「ひとつなぎの建築」と見る端緒となることを意図しています。

その片鱗でも皆様に感じていただければ幸いです。

最後に、このような趣旨に賛同してくださり、展示物を出品してくださった皆様、展覧会の実現と書籍やカタログの執筆・作成にご協力いただいた日本、フィンランド、ドイツの全ての協同者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2021年9月

渡邊大志